

『ドクターヴァンデンボルグの古跡を訪ねて』^{*1}

—日本歯科医学界の先達三人を育てた男—

渋谷 敦 松本 晋一^{*2}

要旨：19世紀末、大望を抱いて渡米した高山紀斎・片山敦彦・一井正典の三青年を次々に庇護し、やがて日本歯科医学界の先達たらしめた米人歯科医師ヴァンデンボルグ一家の古跡を、アメリカ西海岸に探る。

In the late 19th century, Dr. KISAI TAKAYAMA, Dr. ATSUHIKO KATAYAMA and Dr. MASATSUNE ICHINOI who made great success in the modern Japanese dentistry, were took care of by Dr. VAN DENBURGH and his Family, We have visited the Dr. VAN DENBURGH's historic sites in California.

Key words：ヴァンデンボルグ VAN DENBURGH, 高山紀斎 KISAI TAKAYAMA, 片山敦彦 ATSUHIKO KATAYAMA, 一井正典 MASATSUNE ICHINOI

1. はじめに

高山紀斎や、一井正典に与えたドクターヴァンデンボルグ一家の恩恵がいかなるものであったかについて、我々は「一井正典とドクターヴァンデンボルグ」と題して第20回日本歯科医史学会及び本会誌19巻第2号に発表した¹⁾が、今回はさらに片山敦彦もまたドクターヴァンデンボルグの庇護を受けた一人であったことを確認し、我々の念願であったヴァンデンボルグの墓参と、往時のかれら3人を含めたヴァンデンボルグの古跡を、サンフランシスコ周辺に探った。

2. 片山敦彦について

片山に関する資料は極めて少ないが「歯科医事

衛生史前巻」²⁾及び「開国歯科医人伝」³⁾には「明治18年カリフォルニア大学に歯科を学び、21年11月帰朝、22年7月再渡航、米国オハイオ州インディアナ歯科大学卒業、23年5月、開業免状下付、24年4月帰朝後は高山歯科医学院の創立に参与し、のち京橋区滝山町ならびに神戸市に開業、32年清国に航し、明治41年1月9日死亡」と記載され、「東京歯科大学百年史」⁴⁾には、彼を「高山紀斎の主な門下生38名中の一人」として「明治22年カリフォルニア大学歯学部を卒業して一旦帰国、高山歯科医学院開校時の専任講師6人中の一人」と記し「2度目の留学から明治24年5月に帰国、同学院の歯科器械学を担当、後に開業医となったので、後任に一時榎本積一が担当し、その後明治27年9月に帰朝した一井正典が招かれた」と記されている。当時2回もアメリカに留学した学歴もあり、日本歯科医学界の優れたパイオニアの一人であったにも拘らず、片山は短命に終わり、しかも中国の地に没したため、その経歴は必ずしも明瞭ではないのであろう。ところが今回、その経歴の一部が判明した。その一部とは、彼が1回目に渡米してカリフォルニア大学に席を置く以前に、

^{*1} “Visit to the Dr. Van Denburgh's historic sites in California”—“The Man Who Brought up Three Pioneers in the Early Modern Japanese Dentistry”

^{*2} Atsushi Shibuya and Shinichi Matsumoto, Association of “Talking about Dr. MASATSUNE ICHINOI” 「ジウグリット先生を語る会」会員

本論文要旨の一部は第21回日本歯科医師学会(東京歯科大学, 1993年10月)において口演した。

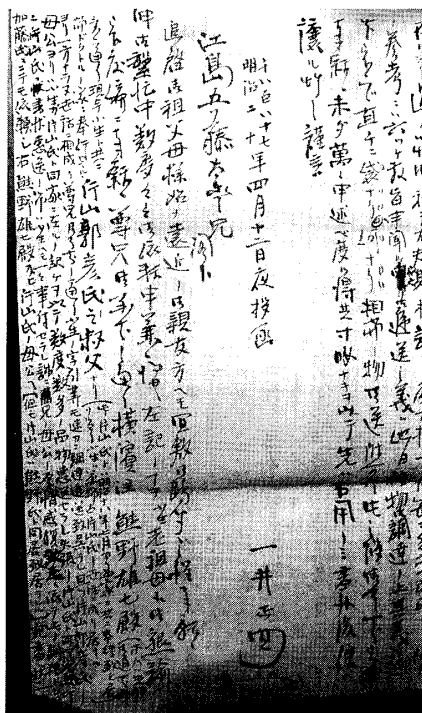


図1 一井正典よりの江嶋五藤太宛書簡

一井正典と共にドクターヴァンデンボルグの家に寄留し、農夫として約2年間働いていたという資料が出て来たのである。それは一井正典(当時24歳)が、彼の故郷熊本県人吉町に住む友人江嶋五藤太に書き送った明治18年8月投函の書簡⁵⁾に、「小生ノ愛友片山敦彦氏ハ昨年四月ヨリ当家ニ奉公致居ラレ候、小生モ実ニ右片山氏ノ周旋ニテ在罷申候」の文言があり、続いて明治20年4月投函の手紙にも「現今小生ト共ニ当ドクトルノ家ニ奉公セラル片山敦彦氏」「此ノ片山敦彦氏トハ明治十八年七月ヨリ当家ニ共ニ奉公致シ居リ候ヨリ小生ハ万端右片山氏ノ世話ニ成リ居リ候」云々と書かれている(図1)。これらの文面から察するに、片山敦彦は明治18年4月から20年4月ごろまで寄留したと推定され、一方一井正典は18年7月から22年2月まで同家に滞在した。その場所はサンフランシスコから約100キロ離れた小村ロスゲトスに新築した住居である(後述)。ちなみに高山紀斎が当家に寄留したのは明治5年(或いは6年)から11年まで、場所はサンフランシスコ市内の旧宅である(後述)。

以上のことから、日本歯科医学界の先達高山・片山・一井の3人は、共に在米時代ドクターヴァンデンボルグによって育てられたと断言しても支障はないものと思われる。



図2 ヴァンデンボルグの旧居跡付近(サンフランシスコ)



図3 妻エリザベスが通った教会(サンフランシスコ)

3. 古跡探訪

1) サンフランシスコ市の中心街ユニオン・スクエアに近い Geary St. 229 は、かつてヴァンデンボルグが1864年から1878年頃まで住宅兼用の歯科診療所を開いていた場所である(図2)。明治5(1873)年の暮れか6年の初め頃、歯痛に苦しんだ高山紀斎(当時22歳)が、この診療所に駆け込んで治療を受け、以来住み着いて歯科医術をむさぼるように習得した記念すべき故地である。1906年3月の大地震で町は変貌したが、長い坂道や古い建物の一部は当時のままに違いはない。現在このあたりは治安が悪く昼間でも車から降りて写真を撮ることは危険だと忠告された。

2) サンフランシスコ市の西部 Fillmore St. にある Calvary Presbyterian 教会。ここはヴァンデンボルグの妻エリザベスが信仰のために50年にわたって通った教会である(図3)。ステンドグラスが見事であったが、教会の当局者にたずね

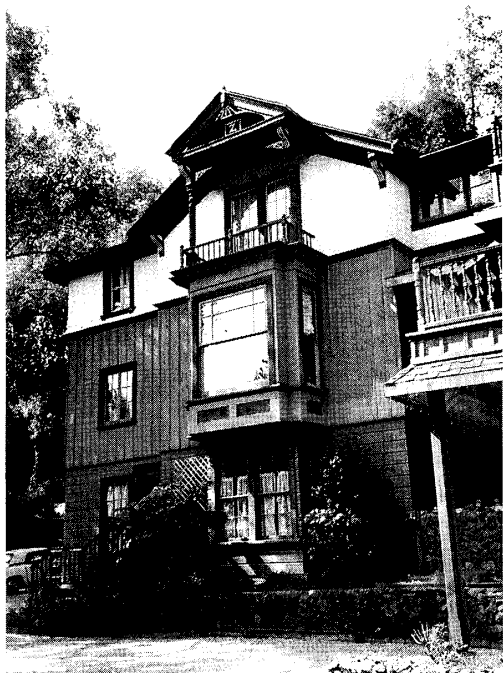


図4 ヴァンデンボルグの旧居(ロスゲトス)

てみても、もう彼女の名前を記憶している人はいなかった。

3) サンフランシスコ市の南々東約100キロの Los Gatos には、ヴァンデンボルグが明治18(1886)年に新築して隠棲した館が今も建っている(図4)。当時このあたりは新開地で、果樹園が多かったはずだが、今は鬱蒼たる樹木に覆われた高級住宅地となっている。61歳でサンフランシスコ市内の診療所をたたんだヴァンデンボルグは、ここに20エーカーの土地を求め、日本からやって来た片山敦彦・一井正典の2青年を農夫として雇って開墾させたが、一方2人の真摯な向学心に同情し、勉学への手助けや学費の幫助を続け、遂に一流の歯科医師への道を拓いてくれた記念すべき館である。そして、この館には、また一つの後日談がある。それは明治26(1893)年8月、シカゴで開かれた第2回万国歯科医学会に日本代表として出席し「日本における歯科学の現況」と題して講演し、同学会の名誉会頭に推された高山紀斎が、そのあと謝恩の心をこめてこの館を訪れ、ここに数日間滞在して旧交を暖め歓を尽した所⁶⁾である。その時から今年はちょうど100年目に当たる。

この館には現在彼とは無関係の人が住んでいるが、我々の訪問の意を解して、家の隅々まで案内



図5 ヴァンデンボルグ旧居の古いストーヴ



図6 ベランダから見た日本式庭園

し、写真も撮らせてくれた。陶器製の古いストーヴ(図5)、鎖を引いて水を流す旧式のトイレ、二階のベランダから見下ろす日本式庭園(図6)、これは片山・一井の2青年が汗を流して作ったものではなかったか。庭先に茂る南天の木は、このあたりには見かけない木だといい、これこそ紛れもなく当時一井青年が、故郷の人吉から取り寄せて植えたものと断定してよいであろう(図7)。当時発信の書簡の中にその間の事情が記されているからである。高山も片山も一井も歩いたであろう敷石、上下したであろう螺旋階段、一木一草にいたるまですべて感慨の対称となった。

4) サンフランシスコ市の南々西約30キロの Colma 市の Cypress Lawn 墓地にヴァンデンボルグ一家の墓を訪ねた。なだらかな芝草のスロープに並ぶいくつもの墓石の中に“VAN DEN-BURGH”と大きく刻まれ、一家5人の名が読みとれた(図8)。

ヴァンデンボルグ夫妻には2男1女が居たが、いずれも結婚しなかったため、ヴァンデンボルグ家は後に断絶した。この墓石には夫妻と1女の没



図7 熊本から取り寄せた南天の木



図8 ヴァンデンボルグ家墓碑（サイプレス・ローン墓地）

年月日は刻まれているが、2人の息子のそれはないので、この墓は1918年から1924年までの間に作られたものと思われる。Dr. DANIEL VAN DENBURGH は1911年10月29日に87歳で亡くなり、妻の ELIZABETH は1918年8月29日に同じく87歳で亡くなっている。彼女の父は著名な外交官で、彼女自身も著書や著述もある賢夫人だったらしい。娘の MARY は両親に先立つ1907年に42歳で死亡。長男の DOUGLAS は先天性の身体障害者で、手足の自由がきかず、電気自動車を乗りまわす体であったが、子供たちの中では一番の長命で1931年に61歳で亡くなった。次男の JOHN は理学と医学の二つの学位を持つ爬虫類の学者だったが、1924年、52歳のときハワイで非業の死を遂げた。19世紀のアメリカを象徴する、裕福で教養があり、しかも3人の日本青年に限りなく優しく、そして彼らに成功の動機を与えたヴァンデンボルグ一家。その墓前に我々は小さな花鉢を供え、哀悼と感謝の頭を垂れた。

4. む す び

明治初期に渡米し鬱勃たる気概と旺盛なる知識欲を燃やし続けた高山・片山・一井3人の日本青年、その3人を家族ぐるみで暖かく庇護して、遂に日本を代表する歯科医学界の先達たらしめた米国人歯科医師ヴァンデンボルグ夫婦。今回はその軌跡の一端を現地に取材した報告である。3人のうち高山・一井については既に発表されたものも多く見られるが、片山については資料も少なく不明の点があるので今後とも調査を継続したい。

なお、今回の調査に協力してくれたナンシーエラズ女史がこれらの人脈や調査を称して、いみ

じくも “It’s all started with a Toothache” と表現したが、まこと日本近代歯科医学のスタートは明治初年の “高山の歯痛に始まる” といっても過言ではないであろう。とすれば、高山の痛んだその歯は臼歯か前歯か、上顎か下顎だったのか、そのようなことまで考える昨今である。本会々員並びに関係諸氏のこの上とものご教示ご指導を仰ぎたい。

なお、今回の調査もまた岡本勝年氏とナンシーエラズ女史の協力をいただいた。記して感謝申し上げる。また、著者らの所属する「ジウグリット先生を語る会」のジウグリット先生とは高山歯科医学院講師時代に学生がつけた一井正典先生のニックネームで、元々は人吉弁で “ぐるりと、順ぐりに等” の意味の言葉を、一井先生を語る会の名称として用いたものである。

文 献

- 1) 松本晋一、渋谷 敦：「一井正典とドクターヴァンデンボルグ」。歯医史 19(2)：57-61, 1993.
- 2) 小川正一郎編：「歯科医事衛生史前巻」。日本歯科医師会、昭和15年、p 70, p 160.
- 3) 今田見信：「開国歯科医人伝」。医歯薬出版、東京、昭和48年、p 56, p 135.
- 4) 東京歯科大学百周年記念誌編纂委員会：「東京歯科大学百年史」。東京歯科大学、平成3年、p 7, p 20, p 21, p 535, p 539.
- 5) 江島家蔵：「江島五藤太宛一井正典書簡」。人吉市、明治18年～22年。
- 6) 奥村鶴吉：「高山紀齋先生小伝」。高山先生銅像建設事務所、明治44年、p 23.
- 7) 高田素次：「嘘のような本当の話」。ジウグリット先生、球磨郷土研究会、昭和58年、p 25.

著者への連絡先：松本晋一

〒868 熊本県人吉市九日町115

電話 0966-22-2928 (FAX も同じ)